僕は草原に立っていた。青々とした草木が風に乗って揺れているのに、爽やかな印象は持てず、不気味なものを感じさせていた。それに拍車を掛けていたのが死体の存在だった。
鉄の鎧に身を包み、剣を突き立てられていたり、獣のような、と形容するしか無い異形の動物が地に伏せていたり。その異形の口には、人間の上半身が挟まっており、趣味の悪い人魚姫だと思ってしまった。
そんな凄惨な死体の数々が転がる草原は、濃厚な鉄と死の匂いが風に乗って周囲を漂っていた。服越しに纏わり付く気持ち悪さに、思わず身震いをする。
「……というより、ここは何処なんだろうか？」
ふと、そんな疑問が……いや、やっとその疑問が頭に浮かんだ。
先程まで居たのはここと似たような所だったはずだった。だが、突然この草原に僕は立ち尽くしており、はっきり言って、どういう状況なのかが掴めていなかった。
困惑と疑問が頭の中を回るが、いくら考えても答えが出てくることはない。記憶を辿ろうとしても、いかにしてこの場に現れたのかが僕には分からなかった。
混乱に移り変わってきたとき、草むらの中から何かがこちらに向かって飛び出してきた。一拍反応が遅れたが、飛び出してきた何かを横に飛んで回避すると、何かを視認しようと視線を向ける。
それは、魔女の窯で煮られたような悪趣味な肌の色をしていた。毛はまったくないが、何処か老婆のように重ねられた肌のシワは、色と相まって恐怖と気持ち悪さを僕の中に呼び覚ましてくる。
フォルムは何処か犬のように似ているが、犬よりは二回りほど大きく、そして筋肉質だ。大きく開かれた鋭い悪魔の歯並びとよだれに、思わず身じろぎをしてしまう。
「これ、多分話聞いてくれないよね……」
口元が引きつり、つい乾いた笑い声を漏らしてしまう。むしろ、動物相手に話が通じると思っていたことに、自分でも驚いていた。いや、この犬……犬？は動物とカウントしてもいいかは疑問が残る所ではあるが。
これの場合、多分犬は僕のことを餌としてみているだろう。犬の口角には誰かの血が付着しており、腹ごしらえは済ませてきていることは理解できた。
だが、僕には武器がある。背中に手をやり、ライフルを構えようとした所で違和感を覚えた。肩が異様に軽い。
まさか、と思いながら首を元々立っていた位置に向けると、そこには肩掛け紐がちぎれたライフルが満足そうに草原に横になっていた。
あのとき、犬の攻撃を回避した時に牙が掠ったことでちぎれたのだろう。
「運がないなぁ……。　っわぁぁぁ！」
血の気が引く僕に、犬は容赦なく僕にもう一度飛びかかってくる。動揺で反応が遅れ、犬に地面に引き倒された。既の所で抜けた銃剣で、口を押さえると、全力を込めて噛みちぎられないように必死で押さえる。

口を開き、歯と歯をガチガチと音を立てて僕の顔面を噛みちぎろうと何度も頭を押してくる。そのせいで、込める力も徐々に弱くなってきて、鼻先に犬の歯が掠り、ビリッとした感覚が走る。吐く息は、血と汚物の臭いをしており、正直に行って相当に臭い。だが、臭いを気にすることが出来るほどに余裕があるわけじゃなかった。

あ、これは死ぬかも知れない。

音を立てて徐々に近づいてくる口に、そう直感した瞬間、走馬灯が頭の中に流れ初めた。村のこと、家族のこと、訓練のこと、戦場のこと。そして、あの友人のこと。

色んな事を思い返したが、やはりなんでここに来たかがわからない。大きく開かれた口を見て、「……死にたくないな」と呟いた瞬間、犬の動きが止まる。

ズルリ、と首が横に落ちていき、顔面と服には紫色の血が大量に掛かった。口の臭いと反して、意外と悪くないけど、ねっとりしていて気持ち悪い。顔から血を拭っていると、男の声が聞こえる。

「……まさか、生き残りがいるとは」

その声には酷く覚えが有った。血を拭い、何とか視界を確保すると声をした方へと頭を向けた。

体格が大きいことと動いている以外は死体と変わりはなかったが、しいてあげるとすれば、兜を被っていないことだ。頭は金髪で、四角く刈り上げており威圧感はたっぷりと有った。それに拍車を掛けたのは顔だ。

顔はいかつめで、実年齢は相当に上に見られそうな顔立ちをしている。そして、僕はその顔は散々になるほどに見た記憶が有った。剣を振るい、血を落として鞘にしまう彼を見て、僕は震える声色で、その名前を呼んだ。

「じ、ジャック？」

「ジェイコブだが」

僕は、元々地方の村の出身だった。それこそ、長閑な農村で、道を通う殆どは牛とそれを引く荷車。ほんの時折、自動車がエンジン音を響かせて走っていった。

そんな村の中で、母親と妹と一緒にのんびりと暮らしていた。慎ましくも、幸せな生活。だが、そんな生活は長くは続かなかった。

原因は、誰かが撃った一つの弾丸だったらしい。それのせいで、どんどん転がっていき、全世界を巻き込む争いが巻き起こったのだ。

正直な所、僕はそんなに村に影響はなかったし、何処か遠いところの話だろうと勝手に考えていた。けど、あれほど静かだった村の道を通る自動車と兵士の軍勢が、数多く通っていく様に僕の考えは楽観的だったと痛感させられた。

幸いにも、戦場の最前線は遠い所に有ったため、村にはあまり被害が出なかった。けど、

無傷と言うには被害がなかったわけじゃなかった。
村の丘に爆撃があった。狙ったわけじゃないその爆撃の被害者が、妹だった。幸いにも、至近距離って程ではなくて、命に別条はなかったが、一生自らの力で歩けない体になった。しかも、その丘は僕たちが小さい頃によくピクニックに行った丘で、想い出深いところだったのだ。
ある日兵士の一人から、敵軍に占拠された村の話を聞かされた。それは、僕の頭に冷水を掛け、そして、決心するのに大きな後押しとなった。
僕は、家族の反対を押し切って、兵士になった。国を守るためなんて大層なものじゃない。ただ、僕はあの日常をこれ以上壊されたくなくて、守りたかったのだ。
訓練は舌を噛みちぎる方が楽じゃないかと思うほどに過酷だった。特に、僕は射撃の腕は良かったらしいが、他の事に関してはてんで駄目で、よく教官から折檻を受けていた。
そんな辛さも、妹が味わった痛みとこれからの苦労、思い出を踏みにじられた事に比べれば、些細なことだった。
だが、ある意味で言えば、その折檻のお陰で生き残る術を身に沁みさせ、こうして生きることが出来るようになったのだから、今となっては感謝しか無い。
そんな僕に歩調を合わせてくれた人が居た。それが、ジャックだった。初めて見た時は随分と年上だと思ってしまっていたけど、本当は一つ年上なだけで、そこで更に驚いたのも記憶に新しい。
初めはさり気なく何も言わずに助けてくれたけど、ほんの少しずつ余裕が出てきた僕は、ジャックに話しかけていった。
自分の母親の作るパイは最高だとか、妹は病気がちなのにアグレッシブで大変だったとか、心配してよく手紙を送ってくるとか。ジャックは無口で、ずっと一方的に僕が話かけていただけだった。けど、村を出て一人で居た僕にとってはそうやって黙って聞いてくれているだけでも嬉しかったし、時折頷いてくれていた。
ある日、いつものように故郷の話をしようとすると、初めてジャックの方から話しかけてくれた。
「……お前の名前は？」
初の言葉が、それだったために、思わずコケかけたのを覚えているが、よく考えればお互いに名乗った覚えが無い。僕の名前を呼ぶ人といえば、教官ぐらいしか居なかったような気がする。
お互いに名前を知らない状態で、一緒に訓練をしながら(一方的に)話していたと実感すると、思わず笑いがこみ上げて来ていた。加えてジャックが生真面目な顔で言ってきたのも、面白さに拍車を掛けていた。
だが、それと同時になにか確信めいた物を感じた。この人は裏表のない、いい人じゃないか、という変な確信が。だからこそ、変な警戒心を持つこともなくすんなりと名前を教えることができた。

「ふふ、僕はノアだよ。教えたんだから、君のも教えてよ？」
「……俺はジャックだ」
ジャック。相手の発した名前を頭の中で反復し、記憶に留める。よく考えれば、こっちの方に来てから名前を教えあった人はジャックが初めてかも知れない。僕はそれが嬉しくて、つい口が動いた。
「ジャック、僕は君の事が知りたいな。君は僕の事を知っているのに、僕は君を知らないなんて不公平じゃないか」
「お前……ノアが勝手に話したんだろう？」
「それでも知りたいんだよー。　良いじゃないか、減るもんじゃないんだからさぁ」
駄々をこねる僕に、困ったように眉間にシワを寄せるジャック。暫くの無言の逡巡の末に、彼はぽつりぽつりと話してくれた。孤児院出身で、その中でも年長だということ。出身地が僕の村の近くで驚いたこと。そして、もしかすると僕の村に彼の好きな人がいるということ。そこをつついたら、すっかり黙りこくってしまった。
これが、僕とジャックが名前を知って、お互いを知った友達になった瞬間だった。

――――

「にわかには信じられないな」
「僕は今の状況のほうが信じられないよ。化け物は出るわ、それを剣で両断するわ、友達と瓜二つのやつが現れるわで。挙げ句にはマッチすら知らないなんて」
パチッ、と薪の弾ける音と炎のゆらめきは、夕暮れの僕ら二人を照らしていた。彼……ジェイコブはお玉で鍋をかき混ぜる。対岸には僕が丸太の上に銃床を地面に付けて座っていた。
先程の邂逅の後に、ひとまずジェイコブに案内され、ちょっとした樹の下へ案内された。そこには馬とテントが張られており、暫くはそこで野営していたことが見て取れた。
木の根元にまとめておいてあった薪を取ると、それを積み上げて火打ち石で火をつけようとした所で、僕はマッチを取り出して渡す。その時の彼の反応はこうだ。
「……そんな小枝でどうするんだ」
「え、マッチ知らないの？」
「まっち？　なんだそれ、魔法の一種か」
この反応に、僕は思わず頭を抱えた。その様子を見て彼は眉を寄せると、改めて僕に質問を投げかけてきた。
「お前は、一体何者なんだ？」
この問に対して誤魔化すこともできたと思ったが、僕の口はつい正直に動いた。
「……僕は、多分この世界の人間じゃない。僕の世界には魔法という言葉は、夢物語だった」
そして、僕は“僕の世界”の話をした。車や国、技術や生活、自身の事をすべて、説明で

きる限り話した。ジャックの顔と全く同じだから、つい油断したのかも知れないが、それがなかったとしても、僕はなんだかんだ言って正直に言っていたような気がする。
初め、彼は信じられないと狂人を見るような目で見てきてはいたが、段々と真剣な表情で話を聞いてくれた。
ひとまず話を終えたところが、先程の信じられない発言だった。
「まぁお前の言い分も分かるんだが……俺の方からしても信じられない。お前を狂人認定するか、頭のネジが飛んだ奴かのどっちかにするか迷っている」
「それイカれてるって事で変わんないよね？」
「冗談だ。だが、本当信じられないな……別世界だなんて」
「別世界……ねぇ」
徐々に暗くなっていく夕暮れに染まっている草原を眺めながら、言葉を思い返す。
車も銃も、故郷の国の名前を出してもイマイチ反応が薄かった。つまりは知らないからこそ、そんな反応しかできなかったのだろう。そして、彼の言葉の中に出てきた一つの言葉、「魔法」というのに引っ掛かっていた。
僕の世界には魔法というものはなかった。魔法なんて、幼少期の頃に憧れて、青年の時にはもう卒業しているものだったからだ。無論、使えるはずもない。
だが、話の中に出てくるということは、ある意味で言えば彼の世界……この世界では普通の事なのだろう。
大きな化け物、剣と鎧、魔法。まるで、小さい頃に見た物語みたいなお話だ。
「別世界だとしたら、本当どうやって来たのかなぁ僕は」
それが一番の疑問だった。実際、僕は立っていた以前の記憶、つまりは戦場へ向かった時の記憶がなかった。最後の記憶が、塹壕の中でしゃがみ込んでいた為、訓練中に……と言うことではないらしい。
何かしらの要因には原因が付き物だし、何かが有ったのは事実なのだろうけど……。
「そんな事、俺に分かるはずもないだろう」
木のお椀に、グズグズに煮込まれたオートミールをよそい、僕へと差し出してくる。ふと表情をみると、威圧感満載だった。だが、不思議と恐怖はない。僕が知っている彼と表情の癖が同じだったからだろう。
ジェイコブは、今言葉を選んでる。正面に座っている僕に対して、しっかりと向き合って話そうとしている。狂人と一蹴することもなく、だ。
そういう所は、ジャックと同じなんだな。本当、不思議なものだ。
「……まぁ、そのなんだ。腹一杯になったら多分思い出すだろ。食え」
「ハムとか付けてくれると嬉しいんだけどね」
「じゃぁ要らないって事でいいんだな」
「ありがたく頂戴します、お腹すごく空いてました」
木のお椀が下げられそうになり、慌てて受け取り、スプーンでかき込んだ。

塩で味を付けてぐずぐずになったオートミールは、食感的には相当ひどいものだった。だが、この素朴な味は故郷の村で病気になった時に食べた味に似ていて、懐かしく思えてくる。
元気にしているだろうか、母親たちは。
かき込みながら、ふと疑問が浮かんできた。尋ねようと思って、すっかり忘れていた。
「そういや、ジェイコブは此処で何してるの？　あの草原の惨状は何だったんだ？」
「んん？　俺は此処で斥候をしている。先日、此処で魔物の襲撃が有って軍が交戦してな。撃退はしたが、警戒のために立っているんだ」
「魔物……あ、あの化け物のことか。あんな怖いのと戦うのか……」
しかもそれに対して、剣で渡り合っている。この世界からすれば当たり前だが、僕の世界からすれば違う。あの化け物と正面から渡り合うなんて、少なくとも僕は無理だ。
だが、僕の発言にジェイコブは神妙そうな表情で呟く。
「俺的には、人間と戦うほうが怖いけどな」
「えっ、何でさ」
「……殺した時点で、相手のこれからの人生を奪う事になるからさ」
「……魔物相手でも、同じじゃないの？」
「まだ、姿形が違うからな。まだ、「こいつは敵だ」って明確に出来る。ただ、同じ人間だと考えが理解できる分、恐ろしく思えるんだ。お前は、恐ろしくなかったのか？」
僕は、その問いに困り果てて空を眺めた。久しく見ていなかった星空がキラキラと輝いている。もしかすると、同じように空を眺めている人を僕は手に掛けてきたのかも知れない。
同じように思い立って、家族を守るために行動した人も、国を守るために、様々な目的を掲げて戦ってきた人たちをすべて。
だけど。
「……恐ろしくても、守りたい物があるからさ。引けない物があるからこそ、僕は武器の引き金を引いたんだよ。これ以上、力ある人に思い出を踏みにじられたくない」
「守りたいもの……家族や故郷か」
「あと日常だよ。あ、それと、友達かな。兎に角、守りたいものがあるからこそ、命を賭けられるんだよ」
僕の返答を聞いたジェイコブは、神妙そうな面持ちで手に持ったお椀へと視線を向ける。
まぁ、人間ってのはそういうものだと思うけどね。食べ終わったお椀を丸太の上に置いて、銃を撫でる。土や泥に塗れたせいで、細かい汚れや傷が残っており、手の平にザラっとした感触が伝わる。帰ったら、しっかりと整備しないと。
そう思った矢先、ジェイコブが突然立ち上がって剣を抜き放つ。手入れの行き届いた剣は、炎に照らされて、キラキラと輝いていた。だが、僕からすれば突然のことで驚きすぎてひっくり返った。
「ちょいちょいちょ、待って！？　何か悪いことした！？」
「違う！　……周りを囲まれたんだよ」

「へっ？」
ジェイコブの発言に呆気にとられ、周りを見渡す。周囲の闇に溶け込んだ何かが、炎の光を瞳に映して周りを囲んでいた。数はそんなに多くはないが、昼に遭ったあの化け物の力を思い出すと、怖気が背筋を走る。
ジェイコブは、表情を引き締める。しずくが、額から顎へと伝っていく。首を両断するほどの腕を持つ彼でさえ、この状況は非常に不味いと思っているのだろう。
「……ノア」
「な、何？」
「お前、話を聞く限り戦えたよな。手伝ってくれるか？」
緊張感のある声色に、僕は頭をかいた。彼を見捨てて、僕は逃げることも出来る。ジャックと似ている彼だから、それを咎めることもしないような気がした。だが、それで良いのだろうか。友達を見捨てて、それでのうのうと生きて、何になるというのか。僕は、それで良いのか？
震えの残る手で銃を杖代わりにして立ち上がる。そして、染み付いた動きでボルトを引いて弾を込め、着剣する。そして、出来る限り努めて笑顔を顔に浮かべた。
「……化け物相手は初めてだけど、急所は人間と一緒でしょ？」
「ああ。結局はどんな生き物も変わらんよ。……来るぞ！」

不思議なほどに静寂が、辺りを包んでいる。先程まで響いていた爆発音と悲鳴、怒号は鳴りを潜めている。
塹壕の壁に背を預け、コンビーフとチーズを挟んだパンを齧る。本当はあまり食べる気にはなれなかったけど、食べないとジャックに怒られてしまう。空いている時間に、胃袋に詰めろとは、最近のジャックの口癖だった。
横をチラと見て、その表情を伺う。あいも変わらずな険しい顔で水筒を傾けており、僕の視線に気づいたのか、こちらへ顔を向けてくる。
「……しっかり食えよ」
「……分かってる」
一言交わし、またお互いの食事を始める。それが日課であり、ある意味では生存確認みたいなものだった。
訓練を終えて前線へ送られた僕たちは、想像していた戦争を目の当たりにしていた。楽観的に捉えていたわけではないが、想像の遥か上を超えていったのだ。
昨日話した同じ部隊の人間が、次の日には死体となって戦塵へと埋もれていく。真隣にいた誰かが、戦闘機の掃射で足を吹き飛ばされた。見知らぬ人の助ける声に反応した人は、機関銃で蜂の巣にされた。

毎日のように死と血と硝煙の臭いに周りに包まれて、はっきり言って、僕は精神的に参っていた。訓練をしていた時には相当話していたにも関わらず、今となってはさっきの一言が僕が今日初めて発した言葉だった。

黙々と食べる僕に、食べ終わって空を眺めるジャック。空は黒煙と混じった鉛色をしており、何処か重圧感を僕に与えていた。

すると、ジャックが口を開いた。普段はあの一言以降喋らず、ずっと戦い続けてきた彼が、口を開いたのだ。

「前に、お前の村に好きな人がいると言ったよな」

「……うん、言ってたね。結局教えてくれなかったけど」

「実はな。それお前の妹なんだよ」

「へぇ……え？」

ちょっと待てよ。今ジャックなんて言ったんだ？

流していたそのカミングアウトに、脳内が一瞬麻痺する。ぎこちない首の動きでジャックの方を見ると、動きに合わせてジャックは視線を逸らす。だが、見えていた耳は寒さとはまた別に赤く染まっていた。

「……おい、何で視線をそらす」

「今すごい顔してたからな」

「君が？」

「ノアが」

そりゃするに決まってるだろう。戦友とも言うべき相手から、唐突に告白されたんだから、変な顔にもなる。その対象が妹となったら尚更だ。

どんな言葉を掛けるべきか、正直言って見つからない。根掘り葉掘り聞きたい気持ちもあるが、それを聞いたら何か失格な気もしてきた。此処は、兄らしい事を口にすべきだろうか？

頭を捻り、言葉を考えていると、ジャックは何処か安心したような表情で笑っていた。あの仏頂面で厳つい彼が、だ。驚きで、考え、組み立てていた言葉ほぼ全て吹っ飛んだ。

「……本当、良かったよ」

その言葉の意味がわからず、「は？」と若干感じの悪い返答をしてしまう。

「な、何がさ？」

「最近のノアは暗かった。ずっと表情を貼り付けているように見えたからな。……少しは解れたか？」

ジャックの言葉は、純粋に心配をしていたのが分かる。そして、やっと意図が分かった。言葉を発さない彼が、あの大きすぎるカミングアウトをしたのは、僕を元気づけるためだったのだ。死に染まり、それに飲み込まれかけていた僕を、ジャックは引き上げようとしてくれていたのだ。

彼の心遣いに、僕は胸が熱くなった。吐き気のように喉に何かが込み上げてくるが、それ

をぐっと押さえ、ニヤリと僕は口角を上げた。
「じゃぁ、戦争が終わったら妹に告白だね」
「なっ……！？」
「ノーとは言わせないよ！　もう宣言したからね！　絶対に告白させる！」
間髪入れない僕の発言に、ジャックは珍しくおろおろした様子を見せる。それを見て、僕は満足げにうなずくと、手を差し出す。
「……だからさ、ジャック。絶対に生き抜こう。じゃないと、将来の義弟に示しがつかないよ」
差し出した手と僕の顔を交互に見ると、ジャックは肩を竦ませた。いつものような生真面目な顔を浮かべると、固く手を握り返す。
「あぁ、絶対に。何があっても、だ」

紫の血に塗れ、ボロボロになったライフルを構える。背中から感じる息遣いと硬さは、まるで熱せられた鉄のような熱さを感じた。
残りの化け物は二体。どちらも手負いだが、正直な所疲労に全身が塗れて、重力が数倍になったように思えた。けど、此処で倒れるわけには行かない。ジャックとの約束があるからだ。ここで、化け物に食われて死ぬわけには行かない。
「は、じ、ジェイコブ……やれる？」
「まだ余裕だ……行くぞ……！」
背中から熱が離れ、一歩大きく踏み出す。化け物は大口を開けて、迫ってくる。ぐらり、と視界が揺れて、よろける。その瞬間、化け物は横を通り過ぎる。
地面へと倒れ込み、肺の空気がすべて外へと出てくる。呼吸を整え、両手を付いて立ち上がろうとして違和感を覚えた。
地面についた腕は片腕だけ。あるはずのもう片方の腕は、肘から先が無くなっていた。血がぼたぼたと地面を染める。視線を上げると、美味しそうに咀嚼をしている化け物の姿が見えた。
「は、はは……これは、笑えない」
不思議と痛みはなかったが、徐々に視界がぐらついて来る。体に寒気が走り、手が震えてきた。目の前には咀嚼を終え、体を震わせる化け物が、身を低くしていた。
このままだと、上半身を噛みちぎられる。いや、噛みちぎるほどではないが、次バックリ噛まれたら死ぬ。その直感が、鮮明に頭に浮かぶ。
このままなら、痛みもなく死ねそうなんだけどなぁ。そんな事を考えながら、ライフルを握りしめる。このまま家族を残して死ぬわけには行かない、友達を残して死ぬわけには行かない。まだ、生きなきゃいけないんだ。

「おおおおお！！」
腹の底から、響き渡るような声を発して化け物へと駆け出す。化け物も呼応するように走り込んでくる。真正面からの激突、それはさながら中世の騎馬戦のようだった。化け物が再び大口を開けて迫りくる。僕は握りしめたライフルを、口の中へ突き出した。ずぶり、と刃が入っていく嫌な感覚が手に伝わった。だが、相手の突撃の勢いは止められない。
腕に全体重がかかり、筋肉が悲鳴を上げ、骨が軋む。だが、此処で勢いに負けるわけにはいかない。踏ん張り、地面に後を付けながらどんどん押されていく。歯を閉じようとしても、ライフルの銃身が邪魔をして、上手く出来ない。
そして、突進の力が緩んだ瞬間、僕は化け物の下顎へと足を掛け、ライフルを縦のまま押し込んだ。ごきゃ、という顎が外れる音とともに、ライフルがつっかえ棒のようになって口はそのまま開きっぱなしになる。
頭を振り、ライフルを退けようとしても銃剣が刺さっているせいで取ることが出来ない。
僕は、足を退けて一歩下がる。腰のホルスターへと手を伸ばすとリボルバーを抜いた。そして、未だに頭を振り続ける化け物へと、弾を放った。
一発目は悲鳴を上げ、二発目で力なく倒れ込み、三発目で虫の息に。四発目を撃った時には、化け物は絶命していた。
「は、はぁ……」
どさり、と地面へと倒れる。柔らかな草が体を包み込んで、中々に心地が良かった。そういえば、あの丘でこんなふうに横になって昼寝をしていたっけ。
声も出ないぐらいに疲れ果てた僕は、空を眺めた。徐々に白み始める空に、思わずため息が出る。
足音が聞こえ、視界の中へジェイコブが現れた。片目を瞑っているようで、そこから血がとめどなく溢れていた。だが、僕よりは軽傷そうで、だいぶ安心した。
「生きてるか？」
「死にかけてる。いや、多分死ぬこれ」
元に、瞼が相当重かった。体が震えるほど寒いのに、眠気が相当に襲いかかってくる。生きたいと思ってはいたけど、流石に無理らしい。
まぁ、ジャックになら妹も母親も任せてもいいだろうなぁ……。
「そうか、けど、残念ながらそうはいってられないぞ」
「いやぁ、多分無理だなぁ……」
「諦めるのは早いぞ。自分の体を見ろ」
体？　その言葉に僕は気怠く片腕を上げる。すると、指先から光の粒子となって徐々に崩れていた。初めから感覚は無くなりかけていたが、消えたところからどんどん消えていく。
その感覚に気持ち悪さを覚えていたが、段々と心地よくなってきたのも事実だった。だが、そんなことよりも困惑のほうが強い。
「へっ？　いやなにこれ」

「俺に聞くな。だが、なんとなく魔法と似た雰囲気を感じる。そのまま待っていれば帰れるだろう」
何処からともなく出した包帯を目元に巻きながら、自信満々でいうジェイコブに、僕は思わず聞き返す。
「本当に？」
「……多分」
多分じゃ駄目だろ。けどまぁ、心地よさの方が勝ってきたので、悪い方ではないのだろう……と、信じるしか無い。体の半分以上が感覚を失ってきた頃、僕は口を開く。
「ねぇ、ジェイコブ」
「何だ、ノア」
「戦争は、楽しいもんじゃないよ」
「聞いた限りはそうだな」
「……この世界で起こらないことを僕は祈ってるよ」
「じゃぁ俺はそっちの世界の戦争が終わることを祈ってる」
お互いの言葉に、笑みを浮かべる。そろそろ消えかかった時に、ふと悪戯心が湧いて、一つだけ言葉を残した。
「さっさと、可愛い子見つけて結婚しなよ」
その言葉に、ジェイコブは一瞬目を見開いて驚いていたが、いたずらっぽい笑顔で片手を上げて言葉を返した。
「とっくの昔に既婚者だ。妊娠もしている」
嘘でしょ、と言葉を発しかけるが、口元が消える。目で訴えるも意識が保てずにそのまま手放す。手放す直前、聞こえた言葉があった。
「子供の名前は、ノアにするか」と。

目を覚ます。見慣れぬ天井に、思わず首を傾げ……ようとして痛みが走った。首元に片手をやると、ギブスと包帯が巻かれており、どうやら誰かが治療をしてくれたらしい。だが、両手をかがげてみると、やはり片腕がなかった。
痛みを発する体を起こすと、多数のベッドと数多の患者が横に並んでいた。看護婦が忙しなく動き回っており、次々に治療や食事など、様々な事をしていた。
「……病院かぁここは」
「あぁ、病院だ」
横からかかってくる声に、思わずぐいっと向けようとして痛みに声が出そうになる。だが、既の所で押さえると、隣のベッドへと視線を向けた。
そこには、片目を包帯で巻いたジャックが横になっていた。あいも変わらずな仏頂面だが、

残った目は潤んでおり、そのままだと涙を流しそうな勢いだった。
首と全身の痛み。片腕を無くし、今やっと起き上がった僕。……うん、何となく読めてきた。だけど、何でこうなったのか分からない。
涙目になっていることに気づいたのか、ジャックは袖でゲシゲシ拭うと体を起こす。どうやら四肢は万全に付いているらしくて、僕はそれに安心した。そして、質問を一つ投げかけた。
「何で僕は病院にいるの？」
その問いに、一瞬呆気に取られていたが、ジャックは表情を戻すとイチから丁寧に説明をしてくれた。
どうやら、あのカミングアウトの後、敵が攻めてきたらしい。それに応戦していた僕たちは、飛んできた手榴弾に気づいていなかったらしく、それに気づいた僕が拾い上げ、ジャックを跳ね飛ばして、塹壕の穴に自分の片腕ごと入れ込んで被害を抑えたらしい。
だが、衝撃で吹っ飛んだ僕は首の骨を痛め、片腕を失い、暫くの間性死の淵を彷徨ったらしい。加えて、ジャックはその戦いで片目を負傷し、二人共この病院で治療を受けていた。
「本当、もう諦めろと言われるぐらいにはひどかったんだぞお前。本当お前、お前ぇ……俺のこと助けやがっでぇ……」
ジャックは嬉しさに回るロと共にむせび泣き、袖で乱雑に涙を拭う。彼の言うようでは、それほどのレベルだったらしい。あまり実感はないのだけど。
じゃあ、あの戦いとジェイコブという存在は僕が見ていた夢なのだろうか。やけにリアルだったような気もするが……。
「お前が死んだら、子供にノアって名付ける所だったんだぞ……」
ジャックのその発言に、思わず耳を疑った。聞き覚えのある言葉だったからだ。
「……え？　なんていったの？」
「だから、もし子供が出来たらお前の名前をつけようと……命の恩人だしな……」
涙を拭いながら、僕の疑問に答えるジャック。その顔を見て、僕はあの世界の彼が頭によぎり、思わず笑い声を上げてしまった。
「ど、どうした。やっぱりなにか障害が……」
「ははっ、はー……いや、ちょっと面白いことがあってさ、思い出し笑いだよ」
お腹を抑え、涙を拭うと、僕はジャックに一つ提案をした。
「ねぇジャック。子供に僕の名前を付ける予定だったのなら、僕が考えても良い？」
「あ、あぁ……構わないが……変な名前はつけるなよ？」
突然の提案に、訝しげにシワを寄せる。ある意味濃厚な付き合いをしてきたのに、その反応はなんだと、言いたくはなったがそれをぐっと抑える。
つけるのなら、僕のもう一人の友達……いや、戦友の名前をつけることにしよう。たった一晩を共に戦い抜いた、彼の名を。
「……ジェイコブ、って言うのはどうよ？」